

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	25 / 2009 / 20-30
タイトル	シンジュ・三四郎池から新制青高草創の頃
著者名	編集部

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

ネット回顧談義 シンジュ・三四郎池から新制青高草創の頃

編集 部

はじめに

本誌巻頭には現青高校長の三上順一氏の「和して更に同ず」を掲載しました。この中に「オンコの木」と「神樹の木」のことが書かれています。オンコ(イチイ)ですが、昨年(平成20年)発行の「東京青高同窓会会報」(13号)に天内康夫さん(3代)の「新田次郎先生とキャンパスのオンコ」と言う一文があり、この木は今どうなっているか、と結んでいました。たまたま、それを読んだ直後に室谷が三上校長を訪問する機会があり、このことを尋ねました。校長は東京同窓会の会合に招かれとき、じかに天内さんにお話になりました。天内さんから昨年の5月26日、室谷あてのメールです。

「ゆうべ、上野で東京青高同窓会の総会があり、見えられた三上校長からオンコの消息についてお聞きしました。貴兄から、オンコのことを気にしている男がいる、と耳に入れていたもようで、懇親会が始まるや私のところにわざわざ見えて、経緯を教えてくださいました。6、7年前、キャンパスの整備のさいに位置を変えたため、果たしてしっかり根付いてくれるかどうか心配していたが、今も大丈夫なところを見れば、もう心配なさそうだとか。事務室には、どこからどう動かしたか、図面とともに記録を残してあるそうです。」

三上校長はシンジュについても述べていますが、このことを「やぶなべ会」の役員たちが常用しているメーリング・リストに流したら五十嵐正俊さん(3代)からすかさず「シンジュの思い出」の書き込みがありました。引き続き天内康夫さん、そして棟方啓爾さん(6代)、五十嵐豊さん(6代)を初め各氏からも貴重な情報が寄せられました。新制青高草創の頃は旧青森歩兵第五連隊兵営を校舎として使い、戦後の苦難のなかを新校舎(7棟白聖校舎)が完成し、その後の建て替えを経て約半世紀後の今日に至るのですが、わけてもこの時代の情報が不足していることから、ここに「ネット回顧談義」としてまとめました。

あらかじめお断りしたいことは、記憶違いがあるかも知れないということです。いや、いっぱいあるでしょう。お気づきのことはお知らせいただき、また写真資料などをお持ちのかたには提供をお願いしたいことです。本誌会報の続号で紹介したいと思います。なお、以下のメーリング・リストでの書き込みは平成20年10月29日から12月18日までのもので、いくつかの話題に分けて整理しました。

シンジュの木と兵営校舎時代

五十嵐(正俊) 私の「シンジュの思い出」です。われわれ世代が松原の仮校舎(私にとっては入学式以来の復学)、一中への間借りからやっと接收解除(駐留軍から)になった旧五連隊兵舎に移った時に数本のシンジュがありました。その1本は生物教官室前で、直径は1 m 近い大木でした。初めて見る木なので先生に教えてもらったと思います。

その後、新制高校になって第1回目の文化祭後の夜に焼失した別棟(北側)の兵舎、ここに、後



[写真1] 青森歩兵第五連隊正門。入ってすぐにロータリー状緑地があり、ここにイチイがあった。(映画「大青森」、1934年から)

に再建された第1次の新築校舎が完成し、木造モルタル2階建ての白堊の学び舎に移りました。焼け残った親木から種が飛んできたと思いますが、完成したばかりの新校舎の脇に芽を出したのが1本のシンジュでした。そのシンジュは見る見る大きくなり、あっという間に生徒たちの身長を追い越して行きました。卒業する頃には校舎の屋根よりも高くなっていったように思います。この様にシンジュは非常に生長が早い木なのです。

室 谷 「シンジュの思い出」をありがとうございます。青高キャンパスとか周辺環境変遷に関連しますので、是非とも関連記事として会報に載せたいと思います。五十嵐さんが在学した頃というのは、最初は「青中」に入学でその後が新制の統合後の「青高」で“統合1回生”だったわけですね。いま考えれば学制改革とか統合などと複雑ななかでの学生生活だったと思うのですが、その辺はどうだったのですか。

五十嵐(正俊) 昭和20年4月、私は軍国主義教育の下で当時の国民学校を卒業して青森中学の入学式には出席したものの、翌日に青森を発って新潟に向かったのです。現新潟空港に建っていた教育機関があって、主として東日本、北海道、樺太から集められた生徒(一部には中学からの転入生も含む)らと中学校の教育過程を学ぶことになっていたのです。一般の中学生たちが国家総動員令の下で勤労奉仕に明け暮れていた時代、毎日5~6時間の中学過程の授業を受けていました。

しかし、8月15日を境に180度人生の方向転換をすることになったのです。8月23日にはすし詰め状態の列車に乗って青森に帰ってきたわけですが、留守中に家は7月28日の空襲で焼失(これは、我々下級生は飛行場を離れ郊外の国民学校に疎開、集団で市内の銭湯に通う途中誰かが持ってきた新聞で知っていた)。家族は全員無事でしたが、知り合いの農家の納屋に疎開をしていました。その後、青森の家族は焼けトタンのバラックの中に畳3畳のスペースを造って生活しました。

復学関係の書類が送られて来たのは10月に入ってからで、中学に行くか、鉄道教習所へ行くか選択するような内容だったと思います。同期生の中には鉄道講習所に移って機関士の道を選んだ者も多かったのです。つい数年前に知ったことですが、新潟時代の同期生が青森県内で蒸気機関車を運転していました。彼は青森機関区長で退職しました。

私の復学のことですが、在籍していたのを覚えていてくれたのが狩野尾義衛先生だったのです。学籍簿が焼失を免れて残っていたかどうか知りませんが、狩野尾先生の記憶のおかげですんなり青中に復学できたのです。記憶が曖昧ですが復学したのは多分10月だったと思います。

話が前後しますが、私の家族が疎開していたのは北津軽郡沿川村(現板柳町)で、近くには十川が流れ自然がいっぱいでした。そこでの生活が生き物好きの火を再燃させたのは確かだったと思います。

室 谷 この昭和20年代の前半に、五連隊兵舎跡と白堊の校舎が段階的に入れ替わっていったわけですが、その配置関係についても思い出せる範囲でよろしく願います。参考までに明治33年に描かれた五連隊絵図(別稿8頁、図3参照)を添付しました。五連隊本部とか各部隊の兵舎が四角のかたちと並んでいますが、便宜上 A から H までの符号をつけました。【編集者注:別稿「環境変遷」と本稿は関連しているので、図や写真を兼用しています。】

五十嵐(正俊) 五連隊の兵営配置図を見ますと、当時のことがさまざま甦ってきました。我々がここに

移ったのは1946年かと思います。机も無く、生徒たちは床に「あぐら」をかいて各自画板(野外で写生などのとき使う)を使っていました。

生物教官室があったのはC棟の1階で全体の職員室とは離れていました。この時、赴任してきた三上喜四郎先生は教員宿舎になっていたB棟にいました。C棟とB棟の間に見える小さい建物は営倉に使用されていたそうで、兵隊の中で規則に違反した犯罪者が収容される場所でした。小さな個室が並び、窓には金網が張られ部屋にはトイレもあった様でした。この建物の天井裏でハトを捕まえたりしました。

D、E棟は我々の教室に使われていましたが文化祭の終わった夜に火災が発生して焼失してしまいました。F棟の裏側(北側)の建物は青高女の生徒が使用していたと思いますが、これも火災で焼失したと思います【編集部注：火災はいずれも昭和22年】。G、H棟は既に無くなっていて、野球部やラグビー一部のグラウンドになっていたと思います。

C棟の前は普通の校庭で、応援歌の練習などはそこでやっていました。問題のシンジュはC棟と校庭(営庭)の間に生えていました。C棟の裏側には駐留軍が洋式に改装したトイレがあったようです。

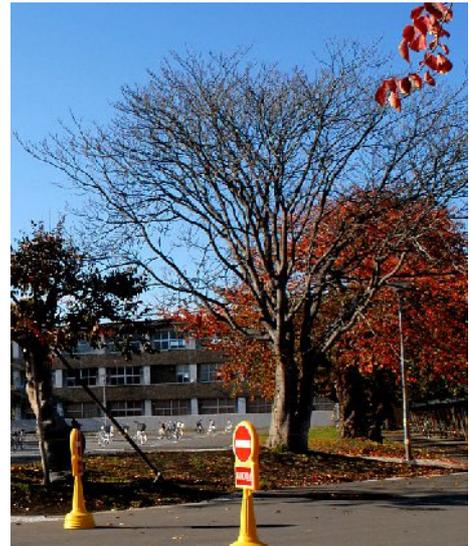
E、F棟の後ろに小さな池があって、これが後に「三四郎池」と呼ばれたところです。とくに魚などはおらずフタバカゲロウ(今考えれば)ぐらいしか記憶に残っていません。活発に動き回るフタバカゲロウの幼虫を生物教官室にあった真鍮の解剖皿に採って来て観察していました。これは私の生物部員としての最初の頃の記憶です。

1947年、6・3・3制が施行されて、我々低学年は青森高校併設中学生になったのです。このあと地元の新中学生が入ってきて、中には生物部員になった生徒もいます(やぶなべ5代生)。60年前の記憶を呼び戻すのは大変なことです。記憶に誤りがあると思いますので、ご存じのかたは適宜訂正してください。

天 内 正俊さんと同期です。火事ですが、当時の小出義雄校長は在任中に2度の校舎焼失にあり、「火事校長」の異名をもらって、翌年八高校長に異動されました。

それから、私ども青中の3年生は100%旧制中学のカリキュラムで進められて、4年生の2学期から完全に「新制高校カリキュラム」に切り替えられました。新制高1では化学か生物のどちらか1科目5単位を履修することになり、生物と物理をしっかりと学びたかった私は、9月から3月までのいい加減な履修で化学5単位をもらいました。

棟 方 こんにちは。大きなシンジュは五十嵐さんご指摘の位置でよろしいと思います。ただC棟裏(西側)のトイレは改修されてはいなかったと記憶しています。写真がありますので添付します(写真4)。このトイレは下記の通りいろいろ部活に利用していました。



[写真2] シンジュ。現校舎前の駐輪場横。(2007. 11. 4)



[写真3] シンジュ。現キャンパス北端の旧北口付近。(2008. 8. 5)

○ 二唐寿郎さん(7代)と同期の和泉宏弥さんがニワトリを飼ってビタミン欠乏症の実験をしていたこと。

○ 三四郎池の前にフレームを作りたいと休日にトイレの板を剥がしていたら、音を聞きつけて今井孝校長が出てきて叱られたこと。前にも話したことがありましたが、卒業の時、校長が呼んでいるというので恐る恐る校長室に入ったら「あのときは厳しく叱って申し訳なかった」との詫びの言葉を頂戴し恐縮しました。後にも先にも偉い人から謝られたのはこれだけで貴重な体験でした。

五十嵐(正俊) C棟裏のトイレは駐留軍用の洋式トイレになっていたと思うのですが(まもなく撤去?)…その他、D棟とE棟の間にはダンス・パーティーにでも使われたのか集会場みたいな建物が増築されていたように記憶しています。床はグリーンのリノリウム張りだったと思います。この頃の生徒の履物は藁草履が主体で、冬は長靴もありましたが、家に帰れば稲藁で造った「ツマゴ」(冬馬の脚に履かせる滑り止めもツマゴと呼んでいたと思う)を着用していました。

当時の我々世代の生活は悲惨なもので、今テレビで見る戦争難民と同じような生活でした。焼けトタンのバラック生活で、借りてきた教科書を書き写したこともありました。教室に使った兵舎も接收後は米軍が使用しやすいように手が入られたようで、柱以外の間仕切り板などは撤去されていたように思う。したがって、教室の中に太い柱があり、教師の死角にもなっていました。

軍国主義教育を受けた少年達が世界観を変えられて、廃墟と化した歩兵第五連隊の跡地で「新しい憲法」のもとで180度違う教育を受けたのでした。

五十嵐(豊) 記憶とは面白いものですね。記憶力の悪い私の記憶では、シンジュの木はCの前に2本ありました。裏のトイレは棟方さん指摘の通りです。小便所を利用してウサギをいっぱい飼育していました。新入部員の最初の仕事はウサギの餌集めでした。

天 内 兵営校舎での授業ですが、机がなく床に座って、画板を膝に置いて授業を受けた懐かしい建物です。7棟校舎を建て始めるにあたって取り壊されたと思います。

昭和21年でしたか、これらアメリカ軍が駐屯していた五連隊兵舎を、青中の(たぶん青高女も)生徒たちが総出で清掃した記憶があります。彼らは軍靴のままで使っていましたから、床の泥落としがたいへんでした。

生物部員がたむろした生物教官室は、写真のC棟の1階にありました。正門から北門へまっすぐ続く通路の、西側一帯を青中(青高)が使っていました。

室 谷 資料を漁ったら興味深い写真が見つかりました。一つは兵営校舎の配置図からするとC棟が見えます。古い建物から右手に空間が若干あって、一番端っこに新しい体育館がかすかに写っています(写真5)。これから撮影年代は昭和24年後半から同25年の前半と推定します。2枚目(別稿11頁の写真11)は、ちょっと良く分からないのですが。

この写真(写真5)を改めて仔細に見たら、手前のサクラ大木の奥に兵舎Cがあつてその前面にスラツとした広葉樹が2本あるいは3本見えます。ちょっとしたら、これが「元祖シンジュ」でないでしょうか。はじめはポプラとかドロノキのように見えていましたが、枝ぶりからタモというカウルシのようにも見えてきて、よく考えて見たらシンジュではないかと。

五十嵐(豊) サクラの木の記憶はないのですが、後ろの木はシンジュのような気がします。写真中央の木は少し小さい気がしますが。たしか2本はあつたように思うのですが。

五十嵐(正俊) 確かに画像はB棟方向からコンクリートのすり鉢池越しにC棟を写したもので、白っぽく

写っているのがシンジュだと思います。生物教官室は画面中央か少し左よりかだと思います。手前の常緑樹(オンコ?)の陰になっていますが。この C 棟2階の右端の方に科学部の部室があり、その隣に美術の織田重信先生がアトリエに使っていた小部屋がありました。

私は一時絵画部にも所属していましたので、何回か織田先生の制作中の絵を見に行っていました。科学部の部屋には蔦温泉の小笠原哲男(旧姓田村)先輩がいたのを記憶しています。コンクリートのすり鉢池は水が無く、生徒の日向ぼっこの場になっていましたし、その隣はテニスコートが作られていて、同期の柿崎君と照井君のコンビが練習をやっていました。C 棟の中央は建物の裏口にも通ずる入り口で、その近くの営庭(校庭)に演壇が置かれていました。

もう1枚の写真(別稿11頁、写真11)の手前に写っているのが、水が溜まったすり鉢池です。テニスコートのネットが緩められて下がっているように見え、ネットを張るポールも見えます。その奥に演壇が見えています。

この写真右手には焼失する前の E 棟が写っています。この頃、生物部の中でカメラを持っていたのは4代の小笠原達君ぐらいで、彼が撮った古い写真をどなたか持っているかも知れません。

室 谷 「すり鉢池」から E 棟ですね。しかも例の火事で焼失した E 棟の写真は貴重です。

資料写真を小出しに出してすみません。山道さん(14代)から昭和34年の素晴らしいカラーの空撮をいただきました(別稿15頁、写真21)。これから兵舎 C 棟とか50 m プール周辺を拡大して1、2、3、…などの番号を付けました。そうすると、配置図(別稿8頁、図3)の営庭の樹木配置とピタリ一致しました。この拡大写真(写真8)の「樹木1」がシンジュで、「2」は何か、「3」は現在もあるケヤキで、「4」のところは5、6本のサクラです。「5」~「7」は判別不明で「8」はイチイがあった円形の緑地。

もう1枚、地上から撮った白黒写真を入手しました(別稿13頁、写真19)。写っている7棟校舎の状況からプール側から撮ったもので、手前の太い木は樹形から「樹木2」に相当します。いかがでしょうか。

五十嵐(正俊) 「樹木2」は間違いなくシンジュです。兵舎 C 棟の生物教官室前にあったものです。

室 谷 ありがとうございます。さきほど書き込んでから、さまざまな事柄が浮かんできました。五連隊の兵営になぜシンジュか? この木の来歴を見ると、この前の会合で徳差さん(6代)から「朝日百科・世界の植物」(朝日新聞社、1980年)の濱谷稔夫氏の解説コピーをいただきました。シンジュは原産地の中国では樗(シュー)と呼ばれ、古来いやしい不用な木、つまり悪木とされてきたが、どうして神樹(シンジュ)となったのだろうか。いきさつを要約すると、インドネシアのモルッカ諸島原産で同属のアイランツス・モルッカナ *Ailanthus moluccana* があり現地名がアイラント、それが天にも届く大木、つまり「天の木」という意味であったことから、ヨーロッパに伝



[写真4] 兵営校舎(C 棟)裏にあったトイレを背景に写す。(1953. 3. 19)



[写真5] 校門を入ってすぐから兵営校舎(C 棟)を撮影。(1949年頃)

えられたときツリー・オブ・ヘブン(天の木)と英訳、1752年ごろイギリスに入ると庭園木とか街路樹として広まり、ドイツに入ったときゴッタ・バウム(神の木)と転訳された。明治の初め、オーストリアで育てた苗が日本に移入されたが、今度は、ドイツ語を訳して神樹(シンジュ)となったというのです。

ときあたかも軍国的な様相が高まっていましたね。各地に軍事施設が造られ「神風」ではないですが、この「神樹」が在来の庭園木、街路樹のケヤキなどに混じって多用されたのではないかと…。

棟方 白黒写真(別稿13頁、写真19)の木はシンジュの可能性が高いです。それからドイツ名は、Goterbaum で日本語訳は神ノ木。単に生長の早い選定基準なら当時ハイカラなニセアカシアでもよかったわけです。林学はドイツから学んでいましたが、軍隊も同じだったのでは。

明治6年にウィーン万国博覧会が開催され、田中芳男、津田仙らが派遣されました。帰国に際して樹木の種子などを持ち帰りました。翌明治7年、田中芳男は博物館構内に播種して育てたニセアカシア 100 本を八代洲河岸(八重洲通りの堀端)に植栽しました。明治 11 年には津田仙がシンジュを内務省脇に植栽しました。これらが洋風の街路樹の先駆けです。(参考:日本大学生物資源科学部 緑地環境計画学研究室 藤崎健一郎「講演録、2007」)

写真のシンジュは葉柄が少しあるようなので雄株でしょうか。雄株は私の記憶とも合致します。それにしても検証は興味津々ですね。

五十嵐(正俊) シンジュの話から、ドイツ林業や軍事までヨーロッパの影響が見られる実証に発展してきたことは誠に面白い話です。白黒の写真に写っていたシンジュの葉っぱ、これは生物教官室前にあったシンジュの木陰から再建された新校舎を撮影した、懐かしい風景です。

兵営校舎から新校舎時代の生物部の拠点

室谷 シンジュに始まって、旧兵舎を使った校舎から新7棟校舎への変り目の生物部(当時は班でしたが、ここでは部と記します)の仕事場まで話が拡がりました。この辺も明らかにしておきたいと思います。それと参考までに昭和23年の米軍撮影の超拡大で不鮮明ですが青高部分もご覧になってください(写真7)。これにも明治時代の五連隊兵営配置図と照合できるように、同じ棟に A、B、C などの符号を付けました。

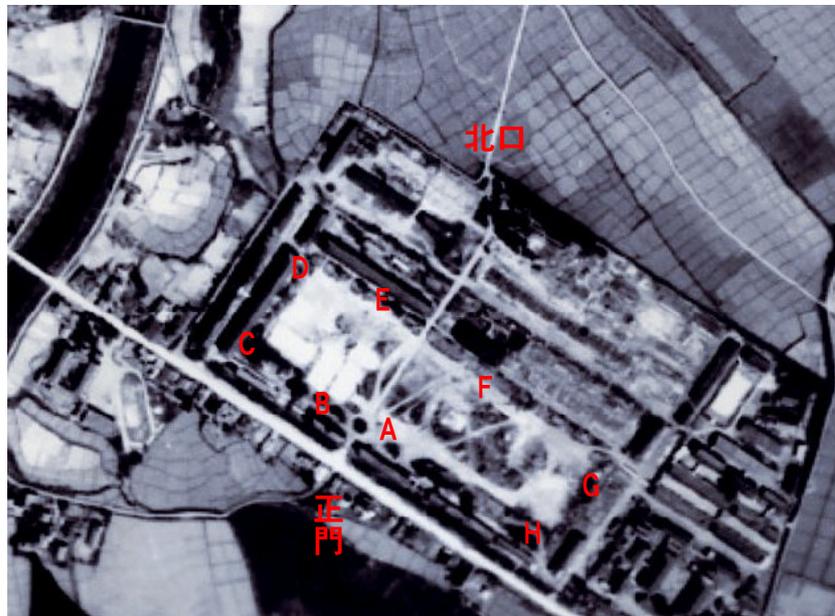
年代的なことを整理しておきますと、五十嵐(正俊)さんと天内さんは、昭和20年4月入学で、昭和26年3月に卒業と思います。五十嵐(豊)さん、棟方さんは、昭和26年4月入学で、昭和29年3月の卒業です。新校舎(7棟校舎)は、昭和24年6月1日に1期工事開始です。予定より遅れて校舎2棟、体育館が建てられました。昭和25年7月21日に2期工事が始まり、生物とか化学などの棟が建てられることになっていましたが、予算の都合でずいぶん遅れたようです。結局、その後の経緯について詳しくは分かりませんが、昭和29年1月4日に本館落成式が行われていますから、これまで全部できたことになります。兵舎西棟校舎(C棟)は、昭和28年10月31日をもって使用禁止になっています。

五十嵐(正俊)さんの頃は、新旧にまたがっていますが生物教官室とか生物部室は C 棟ですね。豊さん、棟方さんの当時は、いかがでしたか。兵営校舎の利用があったのでしょうか。

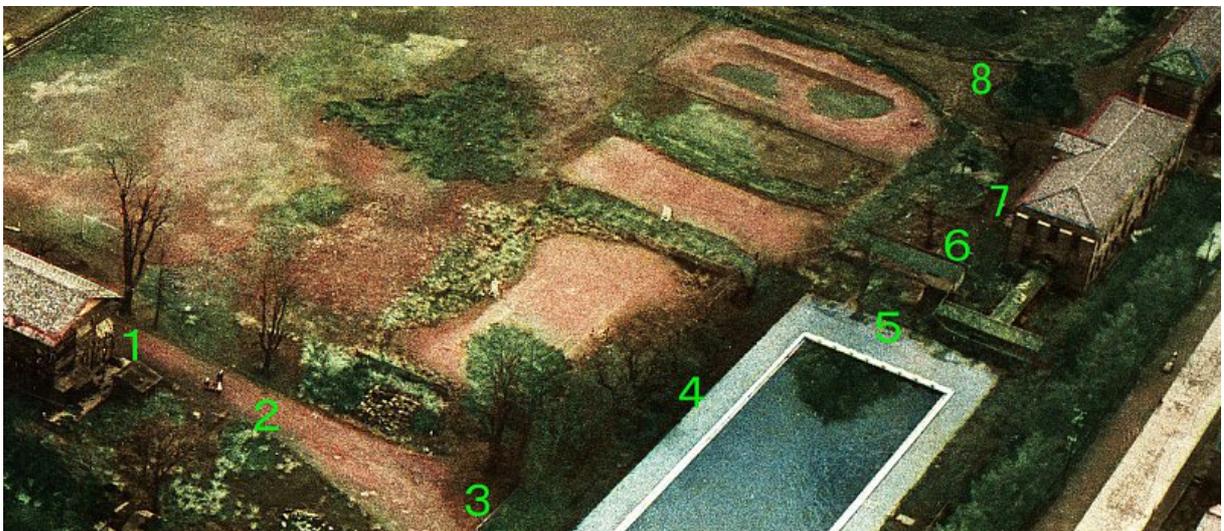
五十嵐(正俊) 最初の教官室は C 棟ですが、教官室には河本達夫先生、下山義明先生、大竹正治先生がおられました。部室はないので教官室に居候してその部屋の廊下側に屯していました。



[写真6] 7棟白壁校舎時代の青高キャンパス、校舎から北口付近を拡大。(1959年)



[写真7] 米軍撮影航空写真から青高付近を拡大。説明の都合上、A、B、Cなどの符号を入れた。(1948年5月15日)



[写真8] 7棟白壁校舎時代の青高キャンパス、南西側プール付近を拡大。説明の都合上、1、2、3などの符号を入れた。(1959年)

生徒たちがあまりずうずうしくしているので、大竹先生に床に白線を引かれて生徒はここから侵入するべからずなどといわれたこともありました。

下山先生は硬式野球部の顧問もやっておられたので、野球部の道具は生物教官室に保管される習慣でしたので、我々はちゃっかり貴重品だったグローブやミット、ボールなどを拝借してキャッチボールをやったものです。その頃は亡くなった葛西重憲君がいたので二人で遊んでいました。私がスポーツ用具に手を触れたのはこれが初めてで、その後生物部に入った野球好きの久保卓嗣君も加わったので3人でよくキャッチ・ボールをやっていました。

教官室にあったのが「菌類図鑑」です。これは手書きか木版だったかですが、林業試験場についてから今関六也博士(保護部長)の部屋にキノコの版木があったので、「菌類図鑑」に使用された版木ではないかと直感したのです。当時、図版作成のための専門絵師(非職員)がいて図版を書いていたようです。私のキノコ好きの原点はこの図鑑が基になっています。

ちよつと脱線してきましたが、新校舎になってからの生物教官室の記憶が無いのですが、卒業までC棟だったのかも知れません。この頃の事情は天内君か鈴木君に補足してもらえばより正確になると思います。

天内 新校舎にも入っています。生物室の隣に準備室があり、そこに三上喜四郎先生や下山義明先生がおられて、部員が出入りさせていただいてはいましたが、兵舎校舎C棟の旧生物教官室は引き続き生物部の飼育室として使わせてもらい、ウサギやハト、ヘビなどを飼っていました。カラスやヘビなどを試食できたのはこの部室があったおかげです。

それから、最初の青中生が兵舎の清掃に行ったときには、C棟、D棟などは五連隊兵舎のつくりのままでした。あちらこちらの小部屋には、壊れた無線機や、大きな乾電池が転がっていて、ラジオ少年だった私には、喉から手が出そうだった記憶があります。もちろん校舎に使われるときには仕切り壁が不細工にブチ抜かれていましたけれども、床に座って受ける授業は、暗くて黒板の字がよく読めないだけでなく、南京虫にも悩まされました。米軍空撮ですが、Bの西寄り部分(写真8の「5」の下あたり)に平屋建ての階段教室があつて松原パパ(勤)の化学の授業や木村ジャコ(滋男)の社会で使われた記憶があります。「8」は間違いなくオンコの植え込みです。

五十嵐(豊) 私達の時はすでに新校舎で、生物教官室の隣の準備室が生物班の部屋でした。室谷さんの時と同じだと思いますが。

室谷 「シンジュの木」に始まって、色々な校舎変遷時のエピソードが寄せられました。昭和34年空撮の7棟校舎写真はカラーですのでスゴイ情報が詰め込まれています。今度は、その上部を拡大しました(写真6)。「三四郎池」の場所は、練兵町からくる直線道路の北門近く、その東側でよろしいですね。写真には淡い楕円形の部分が見えます。

五十嵐(正俊) 三四郎池と言っていたのは北側の田んぼとの境目付近になります。焼失したE棟の裏側になります。水源は田んぼに水が導入されれば自動的に池にも水が入るようになっていたと思います。正門の反対側には田んぼの中に駒込川に向かって1本道があり、風雪の日に数学の田向初三郎先生が道を踏み外し、結局は元の場所にたどり着いて事なきを得たと言う遭難未遂事件があつたとのこと。この1本道は浪打方面からくる生徒の通学路でした。

青高女(当時は浪打校舎で、そこは後に青森商業の校舎になった)との統合後はクラブ活動を一緒に行う男女の交流の道になっていました。

途中の駒込川の橋(晴雄橋)の上から写生した「夕暮れ」と題した私の多色刷り木版画の

作品は高3の年の、東奥展の入選作品で版画家の加藤武夫さん(特選)と同時入選でした。(この年は、亡くなった葛西重憲君も入選しました。)

我々が中学3年生になった時、河本先生の後任に広島大を卒業された田村博美先生が赴任し、化学の女先生(苗字忘れた)、などが赴任してきました。高校になってからは、理科や社会の授業は選択科目制で教科によっては1年生から3年生までが同一教室で授業をうけました。したがって時間ごとに廊下は教室を移動する生徒たちでごった返しの状態になっていました。

私は社会2科目、理科4科目を選択したので理科のテスト時間に2科目の答案を書かなければならなかった。卒業するのに必要な単位を取れば良いので全体の成績順位など全く意に介さなかったのが貧しいながらも良き時代だったと思っています。

卒業後は6・3・3制の教育改革の下で大量の教員不足があったので、新制高校の卒業生であっても申請書だけで臨時教員になることが出来た時代でした。同期生の中には臨時教員になった者が多数います。後に厳しい講習?があったらしいのですが。

それから前後しますが、米軍空撮の五連隊前の広い道路に架かっている橋の北側には細い木の橋があって普段はこれを使っていましたが、橋のもとにガラス工場があって、主として漁業用の浮き玉を作っていました。画像では黒く見えます。学校の帰り道良く覗いたものです。正門から構内を横断して背後の水田に抜ける細い道路が見えますが、北口に近いその道路をはさんで西側の少し太く黒く見える建物は、下士官宿舎とか言われていた建物で一時青高女が使っていた建物かと思います。

正門の右側にある建物が本部のA棟だそうで、教員住宅になっていました。撮影された年代が不明ですが、先日の配置図(別稿8頁、図3)と異なっていますので米軍駐留後に不要な建物を撤去した後なのかも知れません。構内右側の建物群は青森商業、後で新設の新制筒井中学校が使用していた建物かと思います。

室 谷 昭和23年の米軍空撮です。この時点では大分、建物が壊されています。F棟の一部はありません。兵舎G棟は米軍の不審火で焼失したそうです。旧営庭(校庭)も荒れ放題に見えます。ここに新しく白堊の7棟校舎ができ、半世紀余の今になって県内一の豪華な校舎に発展したとは信じがたいことです。戦後間もなくの流浪?変転、そして困窮・不便を極めたなかで、このように目で見て肌で体験した出来事を記録しておくことは大切なことだと思います。

三四郎池今昔

室 谷 私(10代)は昭和33年卒業で、校舎裏側の三四郎池は何かと思いで深いところ。この辺の話に突っ込みたいと思います。昭和34年のカラー空撮の上部拡大(写真6)、これを見て



[写真9] 昭和23年頃の三四郎池(初代)。



[写真10] 三四郎池付近で「第1回やぶなべ会」記念撮影。(1952. 8. 1)

思い出してください。「三四郎池」と呼ばれたのは何時からだったかも知りたいものです。

棟方 新校舎の東から1棟目と2棟の間には、北側に三四郎池があり夜行性昆虫採集とか色々と部活や「やぶなべ会」での思い出が多い場所でした。やぶなべ会発足会もここで記念写真を撮っています(写真10)。雪の上で相撲で遊んだ写真もあります。

天内 「三四郎池」の件ですが、私の在学中(昭和26年3月まで)はもちろん名前がなくて、ただの「池」でした。私には、ヒドラの出芽増殖を確かめたり、ゾウリムシやツリガネムシ、ワムシなどの微生物を採集するのに格好のスポットでした。ここで採取したゾウリムシやアメーバを、どうしたら長期間飼育保存できるかに、煮た麦わら液や青ネギの葉などを使ってチャレンジしたのも C棟1Fの部室でした。懐かしいです。

「三四郎池」の名はもちろん、東大のキャンパスにある池から流用したものでしょうが、今では多くの高校や大学の池に使われているのかも知れません。われわれのころは「東大」の存在を意識する生徒は多くなかったと思いますが、昭和25年入試から始まった「大学進学適性検査」、それに続く「能力検定テスト」(能検テスト)が、高校生の進学意識、東大信仰などを高めていったのかも知れません。

五十嵐(正俊) 「三四郎池」、私どもの時代にその様に呼んでいたかどうか記憶にはありません。世の中がだんだん落ち着いて東大受験を意識するようになってからではないでしょうか？

本郷の東大構内にある三四郎池は学会の折、2階の窓から見たことがあります。中庭にある小さい池で丸太棒の様な魚?(カムルチー?)が数本見えました。美しい池ではありませんでした。これは昭和33、34年頃?(林業試験場の内部研修で身柄だけ目黒の焼け残った保護部の建物に半年間世話になっていた)の思い出です。当時は昆虫の休眠問題に関心を持ち始めていた頃で、毎日試験場の図書室通いでいろいろな雑誌類を読み漁っていました。

私が目黒の本郷に行って言われた事は「マツケムシ」(マツカレハ幼虫)は冬眠しないからガラス張りの恒温槽(水銀式サーモスタット装着)で飼育実験をやりなさいと言うことでした。しかし、幼虫は脱皮はしても成長しなかったのです。むしろ脱皮を繰り返すうちに体まで小さくなるのでした。このときの経験から「昆虫はじめ生物の休眠問題」に関心を持つようになったのです。東大から来ていたN教授(研究顧問)も直属のA科長(博士)も知らないことでした。

棟方 われわれの時代(昭和26年)には三四郎池と呼んでおりました。写真を撮るとか集合する場所として指定していましたから。東大本郷の三四郎池は小生のホームページで紹介しておりますのでご笑覧ください。なかなか佇まいでした。

「本郷キャンパスの春、4月23日」(<http://kmunakata.sakura.ne.jp/h06/H060423-664.html>)

室谷 五十嵐さん、天内さんの時代は、まだ「三四郎池」と名付けてはいないのでは!…了解しました。

棟方さんの「われわれの時代(26年)には三四郎池と呼んでおりました。」…ありがとうございます。

小生が「三四郎池」のネーミングにこだわるのは、「青森高校百年史」(2003年)に“三四郎池と呼んだのは昭和40年頃”という説があるのです。これを覆すよう



[写真11] 棟方さん 在学時代の記念撮影。中段右から5人目のジャンパー着用が寺山修司さん、棟方さんはその左うしろの無帽。(1954年)

な物証が出てくればしめたものです。小生も、すでに在学の頃(昭和33年まで)から「三四郎池」の呼称の記憶はあるのですが。

棟方 三四郎池の呼称は、26年在学生(第4回卒業生)が関係している可能性があります。

具体的には当時の文学部寺山修司・京武久美などなどです。寺山と京武は野脇中学校から友人同士、青高では青森県高校文学部会議を組織するなど活動、3年でも同級でした。写真は三四郎池前で撮ったもので、寺山と京武が写っています(写真11)。

室谷 三四郎池は青高キャンパスをその後転々と2回移りました。昭和45年に7棟白堊校舎から鉄筋白堊校舎に建て替えられたとき、それに一昨年(平成19)の現校舎完成のときです。2代目三四郎池(写真12)は、初代の位置から南側(正門寄り)に、現在の3代目は現校舎の前庭の中心を占めています(写真13)。石郷岡さんの頃(25代)は池の2代目時代ですね。何かありませんか。それから現存するシンジュは一番北側の初代三四郎池の場所にありますが、これについて在校時の思い出がありますか。

石郷岡 「シンジュ」に関しましては、今回の話題が出るまで全く知りませんでした。在校当時も話題になったことは無かったと思います。…当時は野内川方面の調査に皆の関心が向いていたので、校舎付近の環境などは盲点になっていました。ちょうど桜川団地と青高の敷地が密着し、北側の水田が無くなった時期でした。校舎付近の樹木で印象に残っているのは、春の桜程度です。

「三四郎池」(2代目)の周りの状況などはほぼ写真の雰囲気通りです。ただ、在校当時はもう少し荒れていた印象(雑草が生い茂り、水量も少ない)があります。こちらも在校当時あまり意識されない場所でした。殆ど誰も行かない半ば忘れられた場所化していたと記憶しています。…あまり人が行かない場所なので、ある先輩が池の畔で鶏を絞めるのに使っていた事を覚えていて、「三四郎池のそばでの記念写真」なども無かったと思います。在校当時、部室(生物準備室?)が東端に有り、また、教室も西南の方にあったため、普段見る景色は、正門側とグラウンド側が多く、死角になる「シンジュ」、「三四郎池」方面はあまり意識されていませんでした。あまり役に立たない情報ですが、ご参考まで。

室谷 1本1本の木や、ちょっとした水溜まりのような池からこんなに多くの事実というか史実が生み出されるということに感動すら覚えました。会員の皆さんはいかががでしょうか。ここが違うよ、とか耳よりの話がありましたらお寄せください。



[写真12] 鉄筋白堊校舎時代の三四郎池(2代)。(1970年頃)



[写真13] 現校舎前庭の中にある三四郎池(3代)。(2008.11.24)

シンジュについて

シンジュはニガキ科ニワウルシ属で学名は *Ailanthus altissima*。落葉高木、雌雄異株、高さ15~25 m。樹皮は平滑、暗灰色、縦線あるが剥離せず。枝は赤褐色、幼時は黄褐色、細毛あり。葉は互生、大形奇数羽状複葉。小葉は6~12対で、長さ8~10cmの長卵形または卵状披針形で先は鋭くとがり、基部に1、2個の歯牙があり、歯牙の先に腺点がある。6月頃、枝先の円錐花序に緑白色の小さな花を多数開く。果実は、長さ4~4.5cmの翼果で、中央に種子がある。分布は中国北中部原産で明治初年に渡来した。主な用途は庭木、街路樹、器具材など。(編集部)